

# 日本遺産認定

# 佐原・香取子習パンフレット



千葉県香取市

## □ 刊行にあたって

### 香取市長 宇井成一

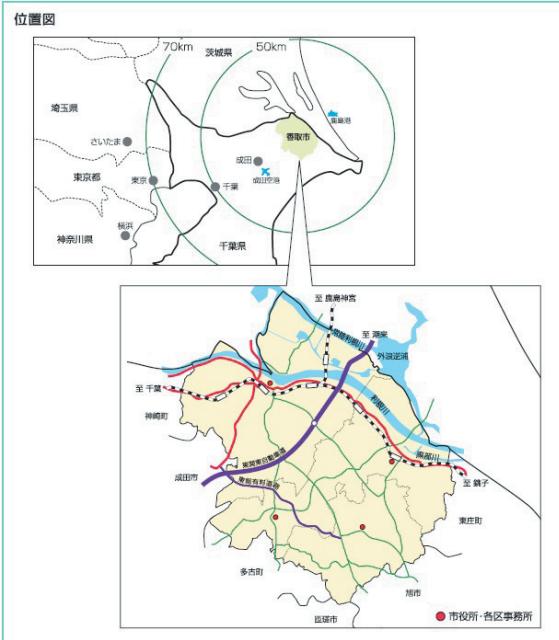
香取市は、千葉県の北東部に位置し、市域の北部には利根川が東西に流れ、その流域には水郷の風情漂う水田地帯が広がり、南部は山林と畠を中心とした平坦地で下総台地の一角を占めています。

日本の原風景を感じさせる田園・里山や、水郷筑波国定公園に位置する利根川周辺の自然景観をはじめ、香取市は水と緑に囲まれ、自然・歴史・文化に彩られたまちです。

香取市は、平成28年4月25日、佐倉市・成田市・銚子市にまたがる北総四都市の町並み群が、「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」として、文化庁の推進する「日本遺産」に認定されました。日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものです。この日本遺産認定を機会に、多くの子供たちに、ぜひ本市を訪れていただき、香取市の魅力ある文化財や歴史的遺産にふれて、学習の場としていただきたく、パンフレットを刊行しました。本書が校外学習や自由研究などの参考になれば幸いです。

## □ 香取市のデータ

位 置	東経 140度29分38秒 北緯 35度53分51秒
	千葉県の北東部に位置する 北部は茨城県と接している
	東京から70km圏
	千葉市から50km圏
	成田空港から15km圏
面 積	262.35平方km
人 口	75,538人
男	37,614人
女	37,924人
世帯数	31,128件
	(令和2年1月1日現在)



### 市 章



美しい水辺の自然、  
広大な水田と里山の自然、未来に広がる青空を香取市(Katori)の頭文字「K」に重ね、  
鳥の羽ばたく形にシンボライズ。  
【平成18年9月3日制定】

### 市の花

アヤメ



### 市の木

サクラ



### 市の鳥

ヨシキリ



# □ 佐原・香取の成り立ち

## 香取の海

香取市の北部、千葉県と茨城県にまたがる地域は、古くは大きな内海が存在していました。その範囲は、霞ヶ浦や印旛沼、手賀沼にも及び、「香取の海」や「香取流海」などとも表現されていました。その後、古利根川などにより上流の泥砂を沈積していき、デルタ地域を形成しました。利根川が現在の姿に近くなるのは、江戸時代の前半になります。

このため、内海との境となる下総台地の縁辺部などに多くの遺跡が残されています。阿玉台貝塚、良文貝塚（小見川）、下小野貝塚（佐原）、向油田貝塚（山田）などの貝塚遺跡、神道山古墳群、又見神社古墳（佐原）、城山古墳群（小見川）などの古墳遺跡など、古の先祖が生活していた痕跡を残しています。



## 中世の香取

中世期においては、市域の多くは千葉氏一族がその勢力を誇っていました。佐原を中心とした地域では千葉氏一族である国分氏が本矢作や大崎に城を構え、また小見川付近には東氏の一族である木内氏などが支配していました。山田の府馬城は、千葉国分氏の子孫である越前五郎時常が室町期に築城したと伝えられます。戦国期になると小見川には栗飯原氏が勢力を有するようになります。また、香取神宮周辺などには神領も多く存在していたようです。

なお、中世期の古文書によると、香取海では「海夫」と呼ばれる漁民集団が存在していたとされ、沿岸には「おみかわの津」「つのみやの津」「さわらの津」など多く津があったとされます。

天正18年（1590）徳川氏の関東入国にともなって、佐原の岩ヶ崎には鳥居元忠が入り、一時期4万石の村々を領しましたが、その後、江戸時代を通じて市域の多くは幕府代官支配地や旗本知行地となります。そのなかで小見川の一部には文禄3年（1594）に松平氏が入り、寛永16年（1639）からは内田正信が領主となり藩領が続きました。



## 利根川の東遷と水運の発達

利根川は、古くは江戸湾（東京湾）へ注いでいましたが、江戸時代初頭から大規模な河川改修を行い、東へ向かわせ現在のように銚子で海へ注ぐようになりました。これにより利根川の中下流域には肥沃な穀倉地帯が広がりましたが、その一方で大雨による氾濫にも悩まされました。

佐原や小見川は利根川水運の発達により、年貢米の津出し場や周辺地域の物資の集散地として栄え、醸造業などの産業も発展しました。この時期、佐原村は「お江戸みたけりや佐原へござれ佐原本町江戸まさり」といわれるほどの賑わいを見せていました。

一方南部には台地や谷津地帯は多くの農村集落が形成されていましたが、佐原から栗源にかけての台地上には、幕府馬牧の一つである油田牧が広がっていました。このため周辺村落には牧の管理等に係わる課役が負わされていました。

## 近代の変遷

明治8年（1875）香取市域は千葉県に属するようになります。そして明治22年（1889）の町村制の施行により、佐原地区には佐原町などの9町村（後に8町村）、小見川地区には小見川町など5町村、山田地区には府馬村など3村、そして栗源地区には栗源村がそれぞれ成立しました。

この間、佐原や小見川は水運による物資輸送の拠点となり、商業地として発展する一方、山田・栗源地区では台地を生かした桑苗栽培と養蚕業が盛んとなりました。特に明治40年代の県内の繭生産額において、府馬や山倉は上位を占めるほどでした。

昭和26年（1951）から30年（1955）にかけての合併により、佐原市、小見川町、山田町が成立、栗源町はこれ以前の大正13年（1924）には町制を置いており、それぞれの市・町の歩みを重ねてきました。

そして、平成18年3月27日、佐原市、小見川町、山田町、栗源町の1市3町が合併して、香取市が誕生しました。

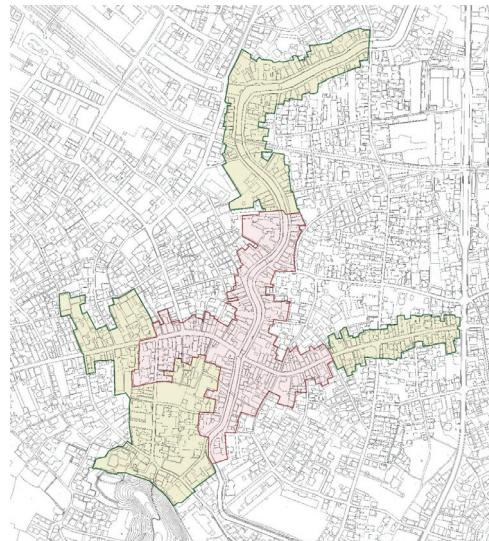
## □ 伝統的な佐原の町並み

佐原市街地の中心部、南北に流れる小野川と、これに交差する通称香取街道沿いの地区。蔵造りの町屋や土蔵、洋風建築などの伝統的建築物が立ち並びます。そして、小野川などの環境と一緒になり、近世以降の佐原河岸として繁栄した歴史的景観を今に伝えています。平成8年12月10日には香取市佐原伝統的建造物群保存地区に選定されました。

香取街道沿い、小野川沿い、下新町通りでは、それぞれ異なる様相の町並みが形成されています。

### ●香取街道沿い

江戸時代以前からの町の中心を通る重要な道路となっていました。街道沿いの建物は比較的小規模で、切妻造平入の建物が多く、軒先や棟が整然とした調和のとれた町並みを形成している。屋敷は間口が狭く、奥行きのある形状をしている。日常品を扱う小売と卸商の店が多数ある。



### ●小野川沿い

港湾商業の中心として栄える。江戸時代の元文年間（1736～41）の洪水により、利根川の流れが対岸の潮来から佐原側へ移ると、小野川沿いには米問屋や醸造業を営む店が増えた。川沿いの建物は比較的規模が大きく、寄棟造妻入の平屋建て、2階建てが多くある。屋敷は大小様々だが、一般に香取街道沿いよりも広い。生業の違いによるものと考えられる。



香取街道 本宿側（昭和初期）



香取街道 新宿側（昭和初期）

### ●下新町通り

香取街道から多古方面へ抜ける通りで、他の2地区とは趣を異にしている。建築物は比較的規模が大きく、その形態は様々で、屋敷も広く堀に囲まれた建物もある。



だし

### 【だし】

小野川には「だし」と呼ばれる石造りの階段状の船着き場が残されています。大正時代に小野川の石垣を直した時に、多くの「だし」がなくなったり、位置が変わったりしましたが、古い写真ではお店ごとに大小の「だし」が設けられていました。その中でも、正上の前にある「だし」ものは古い時代のものといわれています。



ジャージャー橋

### 【樋橋（ジャージャー橋）】

伊能忠敬旧宅敷地内には、江戸時代につくられた農業用水路の一部が残っていて、その先の旧宅前には樋橋がかかっています。もとは江戸時代に佐原村の農業用水を、小野川の東岸の本宿側から、対岸の新宿側の水田に送るための大樋でした。300年近く使われ、戦前にコンクリートの橋になってからも橋の下側につけられた大樋を流れる水が、小野川にあふれ落ちて「ジャージャー」と音を立てるので、「ジャージャー橋」の通称で親しまれています。

現在の樋橋は観光用に当時の様子を復元してつくられたもので、30分ごとに落水させています。

## ◆千葉県指定建造物

地区内の代表的な建物として、8件13棟の県指定文化財建造物があります。

### ●小堀屋本店店舗

昭和49年3月19日指定

桁行2間、梁間3間半、切妻平入り2階建て、桟瓦葺、明治23年（1890）建築、天明2年（1782）にそば屋を創業、江戸時代の店舗の形式を残した造りで、外観は戸口、格子窓などが、内部も蔀戸、畳敷の床などが残る。



### ●正天堂書店店舗

昭和49年3月19日指定

桁行3間、梁間3間半、切妻平入り2階建て、本瓦葺、明治13年（1880）建築（棟札あり）、享保年間（1716～36）に本の販売をしていたとも。明治時代の本屋の形態を残す。2階は明治時代後期に倉庫を客座敷に改造し、3階を設け物置とした。



### ●正上醤油店店舗・土蔵

平成4年2月28日指定

店舗は桁行4間、梁間3間半、切妻平入2階建、桟瓦葺きで、天保3年（1832）の建築。下屋庇の道路側の置き敷居、格子戸、揚戸（鎧戸）、部屋との境の千本格子障子が残り、江戸時代の商家の面影を残す。

土蔵（袖蔵）は桁行3間、梁間2間半、寄棟妻入、2階建、桟瓦葺で、明治初年の建築である。

寛政12年（1800）創業で、天保3年（1832）から醤油醸造業を営む。店舗背面の敷地内に多くの建物が建ち並んだ屋敷構え。店舗前の小野川の川岸には荷揚げ場の「だし」が現存する。



### ●中村屋乾物店

#### 店舗・文庫蔵

平成4年2月28日指定

店舗は桁行3間、梁間3間、切妻平入、土蔵造。明治25年の佐原大火直後に建築されたもので、壁の厚さは1尺5寸（約45cm）にもなる。1階の正面は揚戸と土間の建て込み、2階は観音開きの土戸としている。土戸の「勝男節」「祝儀道具」などの木彫りの看板も見所。

文庫蔵は間口2間、桁行3間の3階建ての建物。1階と2階は明治18年（1885）の建築、3階は店舗とともに明治25年大火の前の形で再建された。

中村屋乾物店は、江戸時代に創業の乾物商で、中村屋の屋号は多古町中村の出身であることにちなむ。

### ●福新呉服店

#### 店舗兼住宅・土蔵

平成4年2月28日指定

店舗は間口4間、奥行8間で、道路側3間半が2階建て、切妻平入り、奥が平屋建で、道路側桁行2間、梁間3間半、切妻平入り、桟瓦葺、奥は棟が直行する切妻屋根、明治25年（1892）の佐原大火後の建築。

土蔵は、桁行4間、梁間3間、切妻平入り2階建て、桟瓦葺、土蔵造の建物。



### ●中村屋商店

#### 店舗兼住宅・土蔵

平成5年2月26日指定

店舗は間口約3間、奥行約5間半、切妻変形屋根2階建、桟瓦葺で、江戸末期から明治期の建物と推定される。安政2年（1855）の建築と伝えられる。1階は内側に揚戸を建て込み、2階正面には繊細な格子窓を組む。

土蔵（袖蔵）は桁行4間半、梁間3間、切妻平入3階建、桟瓦葺で、明治25年（1892）大火後に建築されたもの。

代々、畠表、荒物、雑貨を扱ってきた商家である。



### ●旧油惣商店店舗・土蔵

平成5年2月26日指定

店舗は桁行5間半、梁間3間半（間口）、寄棟妻入2階建、桟瓦葺の建物で、明治33年（1900）の大火後に再建されたもの。

土蔵（袖蔵）は桁行5間、梁間3間、切妻平入2階建、桟瓦葺の建物。寛政10年（1798）の建築で、佐原の土蔵では最も古いものとされる。

旧油惣商店は、寛政年間（1789～1801）頃に佐原に移り住んだと伝えられ、江戸時代には酒造や奈良漬けの製造、明治時代には米・砂糖・下り酒を扱う問屋を営む。



### ●三菱銀行佐原支店

#### 旧本館

平成3年2月15日指定

煉瓦造り2階建てで、大正3年（1914）川崎銀行佐原支店として建築、昭和18年三菱銀行と合併する。明治時代の洋風建築の流れをくむ、ルネッサンス調のデザイン、屋根は木骨銅板（元はスレート）葺で、正面右隅にドームを配する。煉瓦に花崗岩を配したデザインが特徴的。内部は吹き抜けで2階に回廊を設ける。当初の設計図には、清水満之助商店（現、清水建設）技術部の設計になると記されている。



# □ 伊能忠敬の偉業

## ◆伊能忠敬

伊能忠敬（1745～1818）は、江戸時代に日本全国を測量し、初めて実測による日本地図を完成させた全国的に著名な人物です。延享2年（1745）に山辺郡小関村（現九十九里町）で生まれ、17歳で佐原村の伊能家の養子となり、酒造業の他に米穀取引きなどを営み商才を発揮する一方、村役人として村政にも尽しました。

隠居後、50歳で江戸に出て高橋至時に師事し、西洋天文学や暦学を学びました。55歳の寛政12年（1800）から測量を開始し、文化13年（1816）

まで10回にわたって全国を測量しました。文政元年（1818）、73歳で亡くなりました。墓所は、伊能家の菩提寺の觀福寺（牧野）と源空寺（東京都台東区）にあります。



伊能忠敬像



伊能忠敬銅像（佐原公園内）

地図は忠敬の没後、文政4年（1821）に完成し、いわゆる「大日本沿海與地全図」などが幕府へ上程されました。完成した地図は、極めて精度の高いもので、ヨーロッパにおいて高く評価され、明治以降国内の基本図の一翼を担いました。

その事績に関する一括資料2,345点は国宝に指定され、伊能忠敬記念館に収蔵・展示されています。

## ◆伊能忠敬旧宅

国史跡 昭和5年4月25日指定

伊能家は、佐原村本宿組の名主を務める家柄で、酒造業や米穀売買などを家業とする、佐原でも最も有力な商人でした。

旧宅は、小野川に面した店舗と正門、店舗の奥に続く炊事場と書院、さらに書院の東側に建つ土蔵が残されています。

また旧宅敷地内には、江戸時代につくられた農業用水路の一部が残って、その先に樋橋（ジャージャー橋）がかかっています。



店舗



土蔵



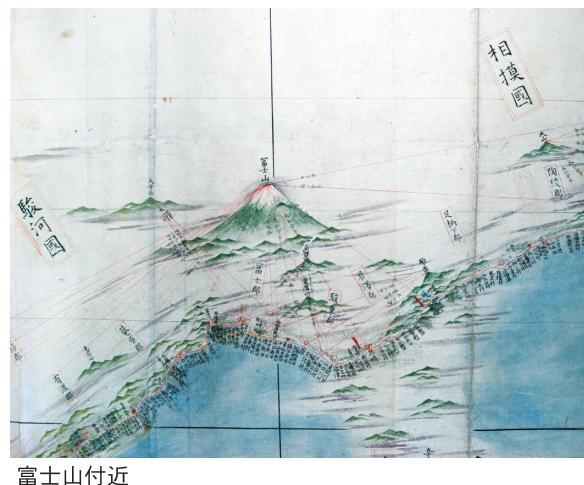
伊能忠敬墓  
(觀福寺内)

伊能忠敬年表

年代	西暦	事 項	忠敬年齢
延享 2 年	1745	山辺郡小関村（現九十九里町小関）に生まれる。 幼名三治郎	0歳
宝暦元年	1751	母が亡くなり、父貞恒は兄・姉を連れて実家に帰る	6歳
宝暦 5 年	1755	父のもと（神保家、現在の横芝光町小堤）に戻る	10歳
宝暦12年	1762	佐原村伊能家の婿養子となり、ミチと結婚、名前を忠敬とする	17歳
天明元年	1781	佐原村本宿組名主となる	36歳
天明 4 年	1784	本宿組名主をやめ、村方後見となる	39歳
寛政 3 年	1791	家訓書を書く	46歳
寛政 6 年	1794	家督を長男景敬に譲り隠居、勘解由と名乗る	49歳
寛政 7 年	1795	江戸深川黒江町に住み、高橋至時の弟子となる	50歳
寛政12年	1800	第1次測量	55歳
享和元年	1801	第2次測量	56歳
享和 2 年	1802	第3次測量	57歳
享和 3 年	1803	第4次測量	58歳
文化元年	1804	日本東半部沿海地図を幕府に提出、將軍家斉の上覧を受ける。以後幕吏に登用される	59歳
文化2年～	1805	第5次測量	60歳
文化5年～	1808	第6次測量	63歳
文化6年～	1809	第7次測量	64歳
文化 8 年	1811	第8次測量	66歳
文化11年	1814	自宅を八丁堀亀島町へ移す	69歳
文化12年～	1815	第9次測量	70歳
文化13年	1816	第10次測量	71歳
文政元年	1818	死去	73歳
文政 4 年	1821	大日本沿海與地全図(大図214枚、中図8枚、小図枚)及び大日本沿海実測録(14巻)が完成	

## ●測量年次

測量次数	年代	西暦	測量範囲	忠敬年齢
第1次	寛政12年	1800	東北・北海道南部	55歳
第2次	享和元年	1801	関東・東北東部	56歳
第3次	享和2年	1802	東北西部	57歳
第4次	享和3年	1803	東海・北陸	58歳
第5次	文化2年～文化3年	1805～1806	畿内・中国	60～61歳
第6次	文化5年～文化6年	1808～1809	四国	63～64歳
第7次	文化6年～文化8年	1809～1811	九州1次	64～66歳
第8次	文化8年～文化11年	1811～1814	九州2次	66～69歳
第9次	文化12年～文化13年	1815～1816	伊豆七島 (忠敬は不参加)	70～71歳
第10次	文化13年	1816	江戸府内	71歳

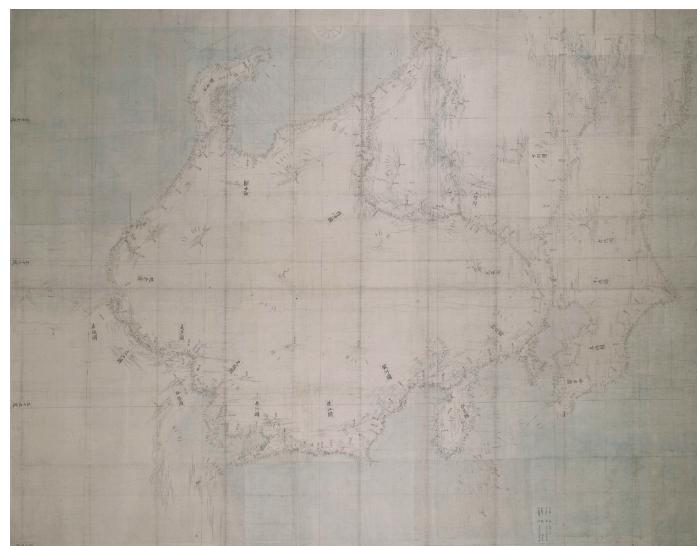


## ●伊能図

伊能図には文政4年（1821）完成の「大日本沿海與地全図」のほか、測量ごとに作った地図や名勝地を描いたものなど、多くの種類があります。いずれの地図も実際に測量して作られたもので、とても正確であるとともに、芸術的な美しさを備えています。

大日本沿海與地全図内訳

大図	214枚	縮尺	1／36,000
中図	8枚	縮尺	1／216,000
小図	3枚	縮尺	1／432,000



東海道・北陸道・東山道沿海図

## ●測量器具



りょうていしゃ  
量程車  
距離を測るのに用いた



らしん  
わんか羅鍼（杖先方位盤）  
導線法の測量に用いる



しょうげんぎ  
象限儀  
天体観測を行う器具



すいようきゅうぎ  
垂搖球儀  
経度測量に用いる

## □ 佐原見どころマップ



# □ 佐原の山車行事（国指定重要無形民俗文化財）

## ●佐原の山車行事

佐原の市街地を南北に流れる小野川を境に、東岸10町内を本宿、西岸15町内を新宿と総称します。佐原の山車行事は、それぞれの鎮守祭礼のつけ祭りとして行われてきた行事です。本宿では7月中旬に八坂神社の祇園祭、新宿では10月中旬に諏訪神社の大祭が行われます。

各町内が意匠をこらした山車を、佐原囃子の調べにのせて、勇壮に、時には厳かに曳き廻します。現在は本宿では10台の山車が、新宿では14台の山車が曳き廻されます。

それぞれの山車が自分の町内を廻る「乱曳き」や、全町内の山車が順番を組んだり、位置を定めて行う「番組行事」、山車の引き廻しの見せ場でもある「曲曳き」などが行われます。

両祭礼の起源や変遷などは不明の部分もありますが、少なくとも江戸時代の中頃には現在の山車行事につながる練り物の祭りが行われていました。その後、徐々に発展する過程で山車が登場し、その上に職人の手による大人形が飾られるようになったのは江戸時代末期頃と考えられます。

平成16年2月に国指定重要無形民俗文化財に指定され、平成28年12月1日にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。

### ◆山車の構造

佐原の山車は、4輪2層構造の曳山です。いわゆる「江戸型山車」の形態とは異なり、独自に発展を遂げた構造です。2本の車軸の上に土台を乗せ、土台に立てられた6本または8本の柱によって2層を支えています。1層目の柱間には敷居や鴨居などを設け、正面を御簾または玉簾で塞ぎます。側面には障子を嵌め込みます（曳行時には取り外す）。1層目の床の周囲には擬宝珠高欄様の手摺りが取り付けます。ここには下座連と呼ばれる囃子方が乗り込みます。

2層目は露天となり、周囲に跳高欄を廻しています。本体の中央には「迫り出し」あるいは「人形柱」などとよぶ真柱を立てて、その先端に「飾り物」と呼ぶ巨大な人形や作り物を取付けています。

使用される材料には主にケヤキ材を用い、その他にヒノキ材やカシ材などを用いて造られます。  
高さ約4.0m、間口約3.2m、奥行き約3.8m

### ◆人形（飾り物）

山車の天井部には、日本神話など様々な説話から取材した歴史上の人物の大人形や作り物が飾り付けられています。

大人形は、身の丈4~5mにおよび日本最大級の大きさを誇っています。

この大人形は、江戸時代から明治・大正期にかけて名人と呼ばれた人形師によって製作されたものです。

作り物には、麦藁細工の鯉や稻藁細工の鷹等、町内の人たちによって製作された昔ながらの飾り物もあります。



### ◆彫刻

彫刻は、「関東彫り」と呼ばれ、ケヤキ材の木地を生かし、重厚かつ繊細に彫られており、後藤茂右衛門、石川三之助、小松光重、金子光晴など、名工と呼ばれた彫工の作品が数多く残されています。

彫刻の構図は、龍や獅子、花鳥のほか、日本神話などの伝記物、太平記、太閤記などの軍記物、三国志や水滸伝などの中国の故事から取材されており、昔話の名場面が、繊細に表情豊かに表現されています。



### ◆佐原囃子

日本三大囃子の一つで、リズム中心の他地域の囃子と異なり、情緒的なメロディーを主体とした独特的の祭り囃子です。

囃子方は歌舞伎等と同じように下座と呼ばれ、笛5~6人、太鼓1人、小鼓4~5人、大太鼓1人、小太鼓1人、すり鉢1人の15人前後で構成されます。和楽器のオーケストラと言えます。



### ◆曲曳き

最大の見せ場としての特別な曳き廻しを「曲曳き」といいます。基本形の曲曳きとして「のの字廻し」「そろばん曳き」「小判廻し」の3つがあり、いずれも曳き綱は使用しないで行われます。

# □ 山車一覧

## ● 夏祭り（本宿地区） 7月10日以降の金・土・日曜日



## ● 秋祭り（新宿地区） 10月第2土曜日を中心とする金・土・日曜日



# □下総国の一宮 香取神宮

## ●香取神宮

香取神宮は、古来より下総国の一宮として、広く崇敬を集めてきました。

茨城県の鹿島神宮と並び称され、香取神宮の主祭神である経津主神は、鹿島神宮の主祭神の武甕槌神とともに武徳の祖神といわれます。

香取神宮が鎮座する利根川南岸の丘陵は、「亀甲山」と呼ばれています。亀の甲羅に似ていることからその名があるとも言われます。現在その全体が「香取神宮の森」として県の天然記念物に指定されています。



県道に隣接する駐車場から総門まで登る現在の参道は大正期に新設されたもので、それ以前は総門から西方へ続く道が表参道でした。その起点は津宮にあり、ここには現在も木製の浜鳥居が建てられています。12年に一度、午年に行われる式年神幸祭では、ここで神輿を御座船に乗せて利根川を遡り、佐原の街中を巡行します。

社伝によれば創始は神武天皇十八年と言われていますが、文献上では8世紀中頃に成立したと推定される「常陸國風土記」に香取神宮から分祀した社の記載があることから、これ以前に香取神宮は存在し、周辺地域に勢力を持っていたと考えられています。

香取・鹿島の両神宮は、大和朝廷の東国支配の拠点として祀られた社を創始とする説があります。これは古代においては香取と鹿島の間には、後に「香取の海」と称される内海が広がっていて、外海にもつながる軍事的な要衝としてみなされたことから、両社はその掌握のため置かれたとされています。

天正19年（1591）の徳川家康関東入部により検地が行われ、その後朱印地として1000石が寄進されました。その後、江戸期を通じて社領に変化はありません。

明治期になると旧幕府封地は明治政府に返上されることになったため、香取神宮も明治3年（1870）に社領を政府に上地しました。翌年5月には全国29社の官幣大社の一つに列せされました。

### ◆香取神宮本殿・楼門

国重文 昭和52年6月27日 本殿指定

昭和58年12月26日 楼門追加指定

本殿、楼門とも元禄13年（1700）に幕府によって造営されたもの。本殿は、正面柱間が3間で前庇と短い後庇を備えた両流造の全国でも最大級のもの。黒漆塗、檜皮葺の重厚な社殿で、蟇股や虹梁・組み物には極彩色の装飾が施され、慶長期の桃山様式の手法を受け継いだ建物である。



楼門は、3間1戸で、屋根は入母屋造銅板葺で、以前は羽目板であった。

周囲の緑の中で、楼門の鮮やかな朱塗りと奥に見える社殿の黒がコントラストをみせる建物である。

### ◆海獣葡萄鏡

国宝 明治37年2月18日指定（昭和28年国宝指定）

直径29.5cm、縁の高さ2cm、重量537.5g、白銅質の円鏡で、鏡面にはわずかに反りがあり、中心部が薄く外縁部になるほど厚くなる。中央に海獣（狻猊）の紐、中心部の区画は葡萄の果実と葉を交互に配し、蔓をからませた文様を地紋とし、大小の8獣が、その外側の幅の狭い区画には、葡萄唐草文を地紋として昆虫や小鳥を、外周の帶部には、獅子などの走獣や孔雀などの鳥類が対になって配されている。正倉院御物のなかに同じ型を用いた鏡があり、唐代の中国で盛行した海獣葡萄鏡の中でも典型的な優品。正倉院御物、大山祇神社の神鏡と合わせ「日本三銘鏡」と言われる。千葉県の工芸品で唯一の国宝。



### ◆古瀬戸黄釉狛犬

国重文 昭和28年3月31日指定

陶器製の狛犬1対で、口を開いた阿形は高さ17.6cm、口を閉じた吽形は高さ17.9cm。手びねりで形成し、ヘラ描きで手並みや眉をあらわしている。淡灰色の堅い半磁質の素地で製作されている。瀬戸古窯で焼かれたもので、鎌倉時代後期か室町時代初期の作品と考えられる。もとは摂社の又見神社に安置。



## ●津宮河岸

津宮河岸は香取神宮への参道の起点として、大鳥居が建つことから鳥居河岸とも呼ばれました。江戸時代には、河岸の両側に「村田屋」などの船宿が軒を並べ、香取・鹿島神宮の参詣人の宿泊所として賑わっていました。

### ◆津宮河岸の常夜燈

市指定有形 昭和52年6月1日指定

津宮鳥居河岸、利根川堤防の中段に建つ石塔。

江戸時代利根川水運が栄えた頃、往来する船の目印として大きな役割を果たしてきた。

銘文から利根川筋の下総国猿島郡辺田村を最初とする近隣村々の36人が講を組み、航行の安全を祈願して明和6年（1769）3月に奉納したものと思われる。

津宮の常夜燈は、地上高は280cm、2段重ねの台座の上に、基礎・方柱の竿・中台・火袋（火を燈す部分）・笠・宝珠で構成される。地中に台座がもう1段埋まっているため、

台座は3段重ねとなり、合せると360cmを超える大きな規模のものだったようである。竿部には「香取宮」、「常夜燈」「講中」「明和六丑年三月廿四日」と大きく刻まれています。

なお、火袋については平成23年東日本大震災により倒れた際に壊れ、再利用には耐えられなくなつたため、新たに復元した。元の火袋は香取神宮に保存されている。



# □ 日本近代医学の中心人物 佐藤尚中

## ● 佐藤尚中誕生地

佐藤尚中（さとう とうか）（1827～1882）は、日本近代医学の中心人物で、東京順天堂医院（後の順天堂大学）の創始者です。

尚中は、文政10年（1827）に小見川藩医山口甫僕の次男として生まれました。幼名を竜太郎、成人後は舜海と名のりました。11歳で江戸に出て寺門静軒に漢学を学び、鳥羽藩医安藤文沢に医学を学び、天保13年（1842）、16歳の時、名医として評判だった佐藤泰然の和田塾に入門し、蘭方医学を学びました。

翌年、佐藤泰然は佐倉藩の招きで佐倉に移り、西洋医学を教授する順天堂を開きます。舜海はそこで頭角を現すようになります。この間、嘉永3年（1850）に父甫僕が死去、家督を継ぐべき兄甫仁が病弱であったため、弟星海を山口家の相続者としました。嘉永6年（1853）舜海27歳の時、佐藤泰然にその能力が認められ養子となり、佐藤姓となりますが、このころから尚中を名乗るようになりました。

万延元年（1860）に長崎に行き、約1年間西洋医学を学びましたが、指導に当たっていたオランダ軍医のポンペは「日本の未熟な外科医の中に、尚中のような優れた医師がいることは例外であり、驚異である」と称賛しました。

明治2年（1869）新政府の招きにより、ドイツ医学を導入するため大学東校（現在の東京大学医学部）の主宰者となり、翌年には大典医に任せられました。明治4年には大学大丞兼大博士大典医に任せられますが、翌5年には大学東校の職を辞しています。

明治6年に私立の順天堂医院を下谷練塀町（台東区）に開設、手狭となったため同8年には湯島（文京区）に新たに順天堂医院を建設し移転しました。これが後に発展し順天堂大学となりました。

明治15年（1882）死去、享年56歳。谷中墓地に葬られました。その入口には、尚中の一周忌に全国の門弟により建立された顕彰碑が建っています。

佐藤尚中の生家である屋敷地跡は、小見川町（現香取市）に寄付され、現在内浜公園として整備されています。公園内には、昭和11年香取郡医師会建立の誕生地記念碑や、佐藤尚中産湯の井戸が残されています。昭和12年3月「佐藤尚中誕生地」として県史跡に指定されました。



佐藤尚中



誕生地記念碑



産湯の井戸



## □ その他のみどころ

### 【江戸歌舞伎の名優 初代松本幸四郎の墓】

県史跡 昭和40年4月27日指定

初代松本幸四郎は延宝2年(1674)に香取市外浜の嶋田家に生まれ、元禄年間（1688～1704）の初めに江戸へ出て久松多四郎の門下となり、最初は松本小四郎を名乗りました。享保元年（1716）に幸四郎と改名、享保13年（1728）11月に「弁慶」の当たり役で喝采をあびます。二代目市川団十郎と並び当時の名優と称せられました。屋号は大和屋（初代）・高麗屋といいます。

享保15年（1730）3月25日歿、57歳。初代松本幸四郎の墓は、善光寺（小見川）の他に、栄松院（東京都文京区）にもあります。



### 【染織処 谷屋土蔵（夢紫美術館）】

国登録 平成11年8月23日登録

谷屋は利根川支流の黒部川周辺の商家などが建ち並ぶ銚子街道沿いの呉服店で、創業は嘉永元年（1848）です。土蔵は瓦葺き2階建ての白色漆喰壁で、明治初期の建築と推測されます。現在の谷屋土蔵は、貝紫（アカニシ貝）の染色製品を展示する夢紫美術館として一般に公開されています。



### 【小見川城山公園】

中世の豪族粟飯原氏の城が築かれたところで、今でも本丸跡が一部残っています。古代の古墳群もあります。公園の入口横には、石を積んで造った洞穴のようなものがあります。これは、城山1号古墳の横穴式石室を復元したものです。



### 【香取市文化財保存館】

県指定文化財「城山1号墳出土品」のほかに市内各所から出土した考古遺物を展示しています。城山1号墳とは、小見川高校が移転する時に発見された全長6.8mの前方後円墳で、そこから出土した装身具・武具や馬具、埴輪などを展示しています。

## 《日本遺産とは》

「日本遺産」は、地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するもので、魅力ある有形・無形の文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することによって、地域の活性化を図ることを目的としています。

文化庁は、2020年度までに、100件程度認定することを目標としています。

## 《ストーリータイトル》

北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み

—佐倉・成田・佐原・銚子：百万都市江戸を支えた江戸近郊の四つの代表的町並み群—

## 《ストーリー概要》

北総地域は、百万都市江戸に隣接し、関東平野と豊かな漁場の太平洋を背景に、利根川東遷により発達した水運と江戸に続く街道を利用して江戸に東国の物産を供給し、江戸のくらしや経済を支えた。江戸からは庶民も観光旅行に訪れ、江戸文化を取り入れた独自の町が発展した。

特に、城下町の佐倉、成田山の門前町成田、利根水運の河岸、香取神宮の参道の起点の佐原、漁港・港町、そして磯巡りの観光客で賑わった銚子の北総地域の四市は、東京近郊にありながら、4種の町並みや風景が今も残り、江戸情緒を体感することができる。

成田空港からも近い、江戸庶民も訪れたこれらの都市は、世界から一番近い「江戸」といえる。



佐倉市



成田市



銚子市

## 《香取市の構成文化財一覧》

- 香取市佐原伝統的建造物保存地区（国・重伝建）
- 伊能忠敬関係資料（国宝） ●伊能忠敬旧宅（国・史跡）
- 佐原の山車行事（国・重無民）
- 觀福寺（国・有形、市・史跡）  
銅像懸仏四躯（十一面觀音坐像、地藏菩薩坐像、藥師如來坐像、釈迦如來坐像）、伊能忠敬墓
- 香取神宮（国宝、国・重文他）  
本殿、楼門、香取神宮旧拝殿、香取神宮神庫、神徳館表門、香雲閣、香取神宮拝殿・幣殿・神饌所、神宝類
- 香取神道流（県・無形、県・史跡他）  
武術 天真正伝香取神道流、天真正伝香取神道流始祖飯篠長威斎墓、天真正伝香取神道流道場
- 津宮河岸の常夜燈（市・有形） ●佐藤尚中誕生地（県・史跡） ●初代松本幸四郎墓（県・史跡）



香取市